

# 86.12.30~87.1.2 おいおいの正月乗鞍

L.郡司光雄, SL佐藤正春, 遠山友樹, 馬場陽顕, 山林真人

今年は何年だそうた。

も、とも去年も 誰れかに そう言われた覚えがあるが、調べるのもめんどうくさい。

正月6日 所用で 清水から東京へ高速道を走行中、タイヤがパンクした。

その夜、雪が降る中も東京から何とか厚木まで戻るが、御殿場が越えられず、又東京へ逆戻り。

正月4日 階段を踏みはずす。

正月3日 いとこ達と身延山へ初もうでに行くが、山門下で大渋滞。せまい急な山道を1時間ほどぬぼるが、ついに退散。なんだか門前払いを食らわされたような気がする。

閑話休題。もっとも以下書くこともみんな閑話だから、時間のないうちは次の散行を読めば事足りる。

何とかまともに滑れたのは3本ほど。そのうち1本だけほどでもいい雪だった。

好天は1月1日だけ。あとは地獄風

結局のところ、あの伝説の乗鞍には比べようのない状況だった。

どうです、ご安心していたらダメなんでしょうか。まだ足りないうちは次の2ページをどうぞ。

12月29日 夜行急行で出発。車中は山ヤがうるさい。

12月30日. 松本で合流の井村さん、かぜ気味で不参加となる。

天候: ほれ (ほれの強風)

リフト上部で佐藤さんと合流。切り開きを登り、台地へ出る直前で道路に落ちる。

重い荷物にみんなバテ気味。その一因を作った食当のほくかひとり元気で申しわけない。

位ヶ原山荘には下らずに、少し下った道路ゆきにも風をよけ、B.C設置。300頃。

郡司さんは頭痛を訴え、食事もとらずに横になる。

牛肉の量に (これはリ-ダ-担当) 圧倒され、へきまきしつから、鍋2杯のすきやきを食べる。残った牛肉は、以降、可能な全ての食事に登場する。

12月31日



< 3/27-ル >

天候: 地吹風、視界10m程度。

10時ごろ。それでもゆしほ...と郡司さんを残し外に出る。登ってきた斜面を2度ほど登り返すか、願が1/41/4と痛い。屋前に退散。

とにかく豪勢な食料をやけにたべてかたをつける。

1日1日

天候: 地吹風 → 晴れ

やっと回復した郡司さんと佐藤さんとほくとで、強い地吹風の中を出発。20分もいかに退散。目もあけてもらえない。

10時すぎ、天候回復。また具合のよくない郡司さんを残し4人で出発。摩利支天、富士見のツルの下から位ヶ原へ滑る。軽い降雪。ほくでもくぬくぬと3/27-ルが残る。感激。

2本目にむけて富士見 - 異出 のコルを目標としてシール登山中、氷化した尾根上で突風に、速山さんと併走は足をすくわれる。沢の斜面に飛ばされた。

沢の中は雪がひかかる。 3.30頃 B.Cへ。

1月2日

天候：雪（強風）

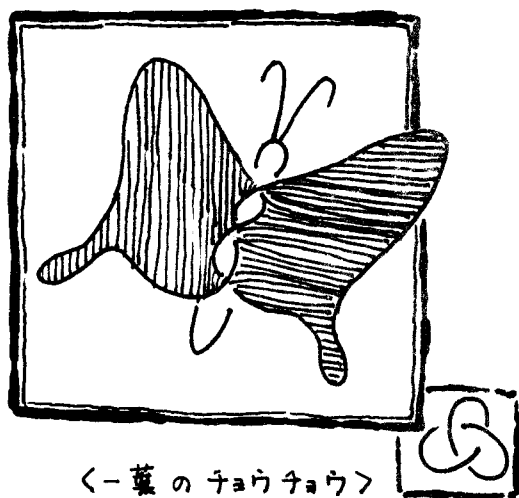
佐藤氏はハッ岳へ転鞍のため下山。

残り4人は肩の小屋を目標だが、強風とガスのため、コルの斜面であきらめ、位ヶ原へ下る。

屋前に下山。

スキー場で、たむか佐藤さんと合流し、温泉につかる。

さて、事ある度に何かの予感とか、前兆、前ぶれとか言うひとがいるが、これは微妙なことはであって、たとえは朝、あきかげに鼻がつまっていたとしても、これは、それ以後、いやな事、凶事、不幸な事が一度も起きないことはないのだから、ああ、あれが前ぶれであつたのか。と思ひこんでもいいのである。



つまり、どんな事でも何かの前ぶれだといえる。

あるいは、こんな話もある。

いつもぬすみを大切にしている男がいて、何か凶事が起きる直前にするとぬすみがさめき出し、それを見ると引越をして、毎度 難をのがれていた。

またぬすみが騒ぐの

で引越をして、さて何か起ったのかと問合せてみると、もとの家の隣にぬこ好きの人物が越してきたという。

そこで困惑して、どうしたものかと首をかしげながら置くのだが、

正月一日、氷化した尾根をシール進行中、突風が吹いて沢にとはされた。

場所は富士見と黒岳のゴルヘのびる南稜の尾根。

とれまでトッパで、適当な所まで…と進んでいたが、樹林帯をぬけるあたりでグラストが始まり、なんとなくトッパが着わり、佐藤、遠山、馬場と続く。いよいよグラストがきつく、ゴリゴリになったあたりで手こずっていると、パーティが長くのびた。

追いつこうと頑張る。シールはかるうじてきている。

ああ、これはヤバイな。沢の中に先に避難しようかな。と思い、声をかけようとした瞬間、突風がきて、ズズッ、ドゥッ、カカカー。

尾根から沢に入りこんだ所ではまる。

けかはたない。

遠山さんもとばされたというが、知らなかった。

まあ、これがここからの厄年の前ぶれであろうとすかろうと人間のほくには判定がつかないし、なー、厄年というのも節分を期に言うのが、旧正月なのか、あるいは神々(神?)も最近では太陽暦のデジタルウォッチをしているのかもしれないし、どうでもいい。

でも、とにかく、何回も繰り返したくなるような気持ちのいいことではないので考えた。

対策。

基本的にはシールがきかないような斜面はシールで登るべきではないというあたりきのことだろうけど、これも難しい。

氷化した斜面は、バンド状に、1.2mだけかもしれないし、いや、

ほんの数mでもスキーアイゼンをつけるべきだ — とも言えるし、1.2mだ  
ったら何とかエッジで滑るような技術に身につける必要はない — と  
も言う。

その辺の見きめめか。まだよくできない。

では見きめめがつくまではどうするか。

簡単なようできて実は難しいことだと思ふ。

まあ当面は、やはり斜面に出会ったら早めにスキーアイゼンをつける—  
くらいでお茶を濁さずしかたないだろう。

た之は今回なら、かりっ、ズリっ、とシールがきかてくはり出したら  
そのままおそろおそろ歩かずに、アイゼンをつける ということだろう。



脈絡なく書くが、今回は異常にテント生活が長かった。

朝起き出して、ヒュウヒュウ ドドドゥー、バチバチバチ という音の中でゴリゴリ  
朝食をすませ、茶を沸かしながら、ベンチレーターをのぞくが、何回見てもミルク  
色。

ある者はあまりのヒマさにこの悪天候をついて近くに狩りに行き、ある者  
は、またまたおやみなさい。

いすれにしても、またまた時間はどうもある。食料もたぶりある。

佐藤さんなどは知らぬ間にひとりで雪洞を掘りあげてしまった。

遠山さんなどは、大分持標の勉強がほかどうたようだし、胃袋も  
きとる倍には大きくなってしまったにらかいわい。

食料といえは、井村さんが不参加となり、郡司さんが寝こんでしまっ  
たのが痛かった。

入山日のスキヤキの肉はショッキングで可らあった。

何とか半分の1kgをたべ2杯のスキヤキにしたものの、トウアセツ  
ラタキ、シュキクまで入っているのだからとても食べきれない。

かてて加えて、ほかの担当した他の食料も全て過量。

佐藤さんのおせらに至り、それはしっかり6人分。

デザートにはしる粉もた、(P.1)。

結局、牛肉2kgは何とか片付けたものの奥脇茶は半分近く持ち帰り。

もちも相当余った。

レトルトやつけものまで余ったのは言うまでもない。

当然、各自の行動食は減るわけなく、夜には必死に酒を減らし、軽量化につとめた。

考えてみれば、これだけの量を背負って、いけば、登りも下りも楽しがるうはるはではない。

ひたすら食べ、眠り、もてあまた単調な時間。

はじめてといていい軽い深雪の滑降、シュワールをつけた尾瀬

その直後の転落。

急転直下、ラベルのボロボロのようは展開だが、さて、これが今シーズンの何かを暗示させるものなのかどうか。

それは神ならぬ身の知るところではない。

(山本)

